紫友 SHIYU

同志社校友会 北海道支部機関誌　再刊第７号　（2018年5月）

同志社と北海道を語るには『新島先生とW・S・クラーク先生』の関係から始めるのが分かりやすい。十勝クラブ・林育雄先輩の文章を羅針盤にボストンへと旅立つことにした。マサチューセッツは北海道と同緯度、気候・気質が近い。両先生が昔の偉人ではなく同時代人に思えてくる。（武田泰一 記）

日本の高校にあたるアンドーバー・フィリップスアカデミーには同志社が建てた「良心碑」がある

1865年ボストンに着いた新島先生が心死で面談をしたA・ハーディ家のあるJoy street

1875年バーモント州ラットランドグレース教会での新島先生の演説に農夫が2ドル寄付ここから同志社が始まった

1821年創設アーモスト大学のシンボル・ジョンソンチャペル　左隣（北側）には新島先生、内村鑑三が寄宿した寮が現在する

同志社校友会北海道支部総会の開催を祝して

同志社大学　学長　松岡　敬

同志社校友会北海道支部総会が盛大に開催されますことを、心からお慶び申しあげます。

校友の皆様には平素より、本学に対しましてご厚情、ご支援を賜わり誠にありがとうございます。教職員を代表いたしまして厚くお礼申しあげます。

本学の創立者新島襄は、「智識あり品行あり、自ら立ち自ら治るの人民、いわゆる一国の良心とも謂う可き人々」の育成を目指して、今から143年前の1875年（明治8年）に同志社英学校を設立しました。この教育理念は、新島が江戸末期から明治初期にかけて、約10年間のアメリカ生活で自ら体得した自由の精神、国際人としての感覚を通して形成されたものです。キリスト教主義精神に立脚した自治自立の人物、そして自由を尊び、良心を手腕に運用する人物の輩出が、同志社教育の目的です。

同志社の良心教育を受けられ、母校を巣立たれた皆様は、様々な分野でご活躍中のこととお慶び申しあげます。これまでのすばらしい成果に深く敬意を表するとともに、今後の活躍に大きな期待を寄せております。新島の思いを精神的支柱にされる会員の皆様が、今なお交流を持ち、母校へ物心両面に渡るご協力をいただいておりますこと、学長としてこのうえない喜びであり、誇りとするところであります。

現在本学では創立150周年に向けた中期計画として「同志社大学ビジョン2025」を掲げ、新たな教学展開を進めており、リーダー養成プログラムや大学院教育改革の推進、高大接続プログラムの新展開、EUキャンパス企画など、新たな教育の展開を目指しています。その一つの成果として、昨年12月に文化庁と日本の大学初となる研究包括協定を締結いたしました。文化庁は今までの文化財を保護するというものから、文化と経済のつながりを考えるというような新たなアプローチを目指しています。文化や経済、社会科学、政策科学など様々な研究リソースのある同志社が共同研究することにより、新・文化庁に対し貢献できることが数多くあるのではないかと考えています。ぜひご期待いただければ幸いです。

同志社ブランドを更に高め、躍動する同志社大学を皆さんに示していく所存です。今後とも、みなさまの一層のご指導、ご協力を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが、ご列席のみなさまが、この場を通じて相互の交流をさらに深められますとともに、今後ますますご活躍されますことを心からお祈り申しあげます。

道内高校訪問

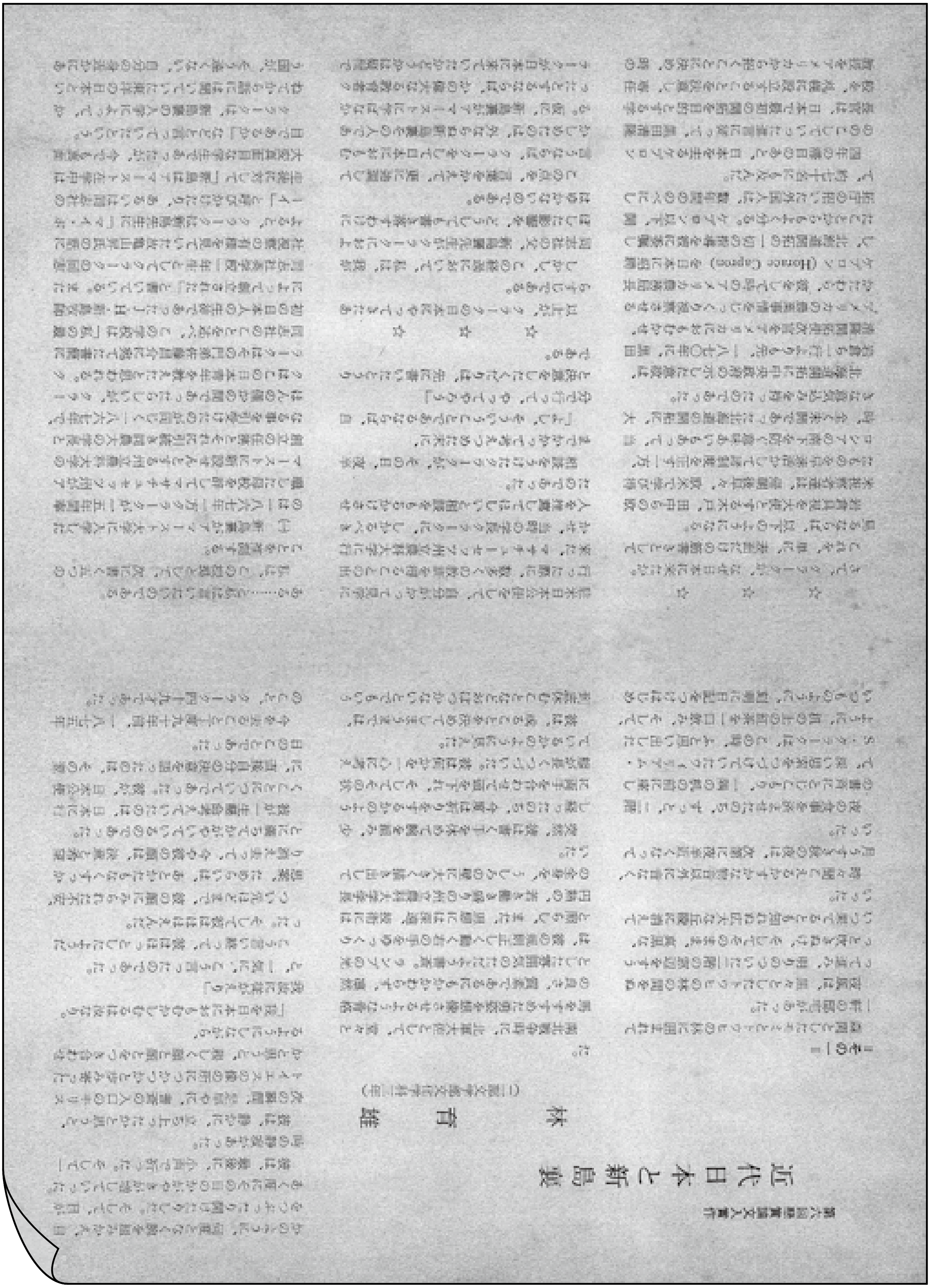
支部長　草野　賀文
（1984年　法学部卒）

松岡学長と初めてお会いしたのは、平成二十二年九月二日。当時私は幹事長をしておりました。東京の事務所から、道内高校訪問をするのでアテンドして欲しいとの依頼があり、三名の先生を3班4人で、車でアテンドすることになりました。私の担当は当時副学長の松岡先生。9月2日に2校、3日に3校のアポイントを取り、函館から札幌に入ってこられました。折角北海道まで来て1日2校では勿体ないと、初日は1校を追加して3校。2日目は4校を追加して7校を足早に駆け回りました。「資料が無い」と困惑顔の松岡先生の袖を無理やり引っ張り、「先生、名刺だけでも十分営業になりますから」と。

事件は初日の9月2日午後四時頃、私立N高校で起こりました。我々が車から降り、二階の職員室にお邪魔するため階段を2～3段上がり始めた頃、上から4人の男の子の集団が我々とすれ違い1階に降り立ったのです。そしてあろうことか階段の電気を消したのです。N高校の階段には窓は無く、二階から差し込む光も乏しい薄暗い階段でした。2人で顔を見合わせ、階段を登り切り、職員室で初日最後の仕事を終えました。

翌日は、7校とハードスケジュールをこなし、3名の先生方と我々アテンド組4名とで、サッポロビール園でジンギスカン鍋を囲み反省会を行いました。そこで松岡先生に尋ねたのです「先生、昨日のN校での出来事、気が付きました？」。「勿論ですよ。あってはならないことですね。」と。「先生、N校に推薦枠を渡す様なことはありませんよね？」「勿論です」と松岡先生。

あの4人の生徒だけが、良心教育を掲げる当校に相応しく無いのかもしれません。あの事件は我々の目に触れたたった4人の生徒があの学校を強く印象付けてしまったのです。そう言えば、私立のR校 市立のS校道立のN校は殆ど全ての子供達が我々に挨拶をしておりました。比較する対象が近くにあり、尚のこと印象に残る出来事でした。



『新島研究33』より転載

の国はるだいっかい開幕。いのりがひらけた。

江　くが来、トトーメスが自ら二十二年間の歳月を費やして建設した神殿。ついに完成。

それを聞いたトトーメスは、ルクソールの神官たちを集めて、盛大な祭典を開いた。

神官、トトーメスの前に進み出ていった。

「王よ、この神殿に、何の神を祭られるのですか。太陽神ですか、それとも、大地の神ですか。それとも、天の神ですか。……」

トトーメスは、静かに、答えた。

「この神殿は、特定の神を祭るものではない。ここは、人間が、神に、感謝を捧げる場所だ。……」

ルクソールの人々は、この神殿を、「感謝の神殿」と呼んだ。

ある日、ルクソールの、ある、ごく、ありふれた、一人の、農夫が、この、神殿の、前を、通った。

農夫は、ふと、足を、止めた。

「……ここは、何の、神殿、だ、ろう、……」

農夫は、神殿の、中に、入った。

すると、そこには、何、も、なかった。

ただ、広い、広い、空間が、あるだけだった。

農夫は、神殿を、出た。

そして、思った。

「……なるほど、これは、神殿、だ、な。……」

農夫は、神殿を、後にした。

そして、二度と、この、神殿に、来ることは、なかった。

ルクソールの、人々は、この、神殿を、「感謝の神殿」と、呼んだ。

ルクソールの、ある、ごく、ありふれた、一人の、農夫が、この、神殿を、訪れた。

農夫は、何、も、祭られていない、この、神殿を、見て、何、を、感じ、何、を、思ったのか、それは、誰、も、知、らない。

ルクソールの、人々は、この、神殿を、「感謝の神殿」と、呼んだ。

ある、日、農夫、は、この、神殿、の、前、を、通った。

農夫は、神殿の、中に、入った。

すると、そこには、何、も、なかった。

ただ、広い、広い、空間が、あるだけだった。

農夫は、神殿を、出た。

そして、思った。

「……なるほど、これは、神殿、だ、な。……」

農夫は、神殿を、後にした。

そして、二度と、この、神殿に、来ることは、なかった

世界観を、ゆっくりと時間をかけて味わうタイプの作品である。

ドラマ、映画、舞台などさまざまな形で映像化されてきた『月光の下で、君を待つ』。原作は、ある山間部の小さな郵便局を舞台に、手紙を届けることしか知らない一人の郵便配達員と、その郵便局に勤める数人の人々の、静かな日々を描いた物語である。

監督を務めたのは、長年ドキュメンタリー畑で活躍してきた、佐藤雅彦。劇映画としては、本作が通算で三作目にあたる。佐藤は、脚本の段階から、セリフの一つ一つを、俳優の口から自然に出てくるかどうかを、何度も何度も確かめたという。

主人公・相沢誠を演じるのは、俳優の高橋一生。寡黙で、表情の変化も乏しい、郵便配達員の役を、ほとんどセリフに頼らずに演じきっている。特に、雨の日に、ずぶぬれになって山道を歩くシーンでは、セリフがないにもかかわらず、観客の誰もが、彼の疲労と、郵便局に戻ってきたときの安堵を、自分のことのように感じてしまう。

ヒロイン・郵便局の事務員、小川真由子を演じるのは、女優の蒼井優。真由子は、誠に恋をしているのだが、その恋は、一度も、はっきりとした言葉にされることはない。二人が、郵便局の窓口で、ほんの一言、二言、天気の話をするだけのシーンが、この作品では、何よりも、美しく、切ない。

脇を固める俳優たちの、抑えた演技も、この作品の、大きな魅力である。誠の、亡くなった父を演じる、ベテラン俳優の、笑顔と、沈黙の、使い分けが、あまりにも、自然で、観ている、こちらの、胸が、ちくりと、痛む。

撮影を、長年、ドキュメンタリーの現場で、カメラを、回し続けてきた、撮影監督の、鈴木一真。彼の、カメラは、人物を、美しく、撮ろうとは、していない。ただ、そこに、いる、ということを、ただ、静かに、見つめている。その、距離感が、この、作品の、リアリティを、支えている。

音楽を、担当した、作曲家の、久石譲。ピアノを、中心に、弦楽器を、少しだけ、加えた、シンプルな、構成の、音楽が、物語の、静けさを、そっと、支えている。特に、エンドロールで、流れる、テーマ曲は、観終わった、あとも、しばらく、耳から、離れない、ような、余韻を、残す。

この、作品を、観ることは、まるで、一通の、手紙を、受け取る、ことに、似ている、ような、気、が、する。急ぐ、ことも、なく、ただ、静かに、自分の、ペースで、読む、ような、時間、です。

ぜひ、劇場で、あるいは、ご自宅で、ゆっくりと、お時間を、とって、ご覧、ください。

☆　☆　☆

ゆい、ゆきは、笑って、うなずいた。表情は、穏やかだ。ただ、口元だけ、ほんの、ほんの、ほんの

剣もたちの冬興業

氷王宮祭の日々

ひるひる冬のなかなかの興業のこと。

ひとたび冬になれば、山々は白く染まり、谷間には霧が立ちこめる。中央の興業ギルドは、この時期を待ちかねていたかのように、剣士たちを呼び集めた。剣の腕を磨いてきた者たち――数年間ずっと修行を続けてきた若い剣士から、ベテランの老剣士まで――が、氷王宮祭の会場に集まってきた。

氷王宮祭は、毎年冬至の日から始まる、三日間の大興業だ。この祭りでは、剣士たちが氷の闘技場で剣を交えて、観客たちに技を見せる。勝敗は、審判が剣の切れ味や、動きの美しさ、そして最後まで立っていられるかを見て、決める。

今年の審判を務めるのは、ベテランの剣士、ヴェルナ・ラドフさんだ。ヴェルナさんは、若い頃に三度、この祭りで優勝した人物だ。今は剣を置いて、後進を育てる側に回っている。ヴェルナさんの目は、どんな小さな間違いも見逃さない。

開祭の日、会場は満員だった。観客席は、毛皮のコートを着た人で、ぎっしりと埋まっていた。中央の闘技場を囲むように、氷でつくられた観客席が、何段にも重なっている。その上から、ストーブの暖かい光が、ぼんやりと会場を照らしていた。

最初の試合は、ベテランの剣士と、若い剣士の組だった。若い剣士は、まだ二十歳にもなっていないように見えた。ヴェルナさんは、開始の合図を出した。

若い剣士は、剣を構えたまま、動かなかった。ベテランの剣士は、ゆっくりと一歩、前へ出た。

若い剣士は、思わず一歩、後ずさった。ヴェルナさんは、その様子を、じっと見ていた。

「怖がるな」と、ヴェルナさんは、後で言った。「怖がることは、悪いことじゃない。だが、その怖さを、剣に乗せてはいけない。剣は、自分の心を、そのまま映す。怖がっていれば、剣も、怖がっている。それを、相手に見せてしまう。だから、まず、自分の心を、落ち着かせる。それが、この祭りで、一番、大切なことだ。」

若い剣士は、その日、二試合を戦った。一勝と、一敗だった。負けた相手は、ベテランの剣士だった。ヴェルナさんは、その試合を、最後まで、見ていた。

夕方、ヴェルナさんは、若い剣士を、控え室に、呼んだ。

「剣は、心を、映す。だから、剣を、磨け。」

若い剣士は、ただ、頭を、下げた。

氷王宮祭は、三日目に、最終日を、迎えた。この日、観客席は、満員、立ち見の人も、出た。ヴェルナさんは、審判の、席に、座っていた。

最終日の、最初の、試合は、ベテランの、剣士、同士、だった。ヴェルナさんは、その、試合を、見ていた。

試合は、長く、続いた。両、剣士、とも、一歩、も、後、に、下がらず、剣、を、交、え、た。ヴェルナさんは、その、試合を、最後、まで、見、て、いた。

試合が、終わった。勝、者、は、ベテラン、の、剣、士、だ、った。ヴェルナさんは、その、剣、士、に、何、か、を、言、った。

ヴェルナさんは、その、日、の、夕、方、に、また、若い、剣、士、を、呼、んだ。

「剣は、心を、映す。だから、剣を、磨け。」

若い剣士は、ただ、頭を、下げた。

氷王宮祭は、四日目に、入った。この、日、は、剣、士、の、試、合、は、ない。観、客、が、氷、の、闘、技、場、を、見、て、回、る、日、だ、った。

氷の、闘、技、場、は、直、径、三、十、メ、ー、ト、ル、ほ、ど、の、円、形、だ、った。観、客、席、は、その、周、囲、を、ぐ、る、り、と、囲、む、ように、作、られ、て、いた。観、客、席、は、氷、で、作、られ、て、いた。観、客、席、の、一、番、下、の、段、は、地、面、から、三、メ、ー、ト、ル、ほ、ど、の、高、さ、に、あ、った。観、客、は、ここ、に、座、って、闘、技、を、見、る、のだ。

観、客、席、の、上、に、は、ストーブが、ずらっと、並、んで、いた。ストーブの、火、は、赤、く、燃、え、て、いた。ストーブの、火、の、光、が、観、客、席、を、ぼ、ん、や、り、と、照、ら、して、いた。

観、客、は、ほ、と、んど、が、毛、皮、の、コート、を、着、て、いた。毛、皮、の、コート、の、ま、ま、で、は、暑、い、ので、観、客、は、コート、を、脱、ぎ、て、膝、の、上、に、置、いて、いた。

闘、技、場、の、中、は、氷、で、つ、く、られ、て、いた。氷、の、表、面、は、ま、っ、す、ぐ、で、平、ら、で、光、って、いた。氷、の、上、に、は、砂、が、撒、かれ、て、いた。砂、は、足、が、滑、る、のを、防、ぐ、ため、だ、った。

剣、士、た、ち、は、この、氷、の、上、で、剣、を、交、え、る、のだ、った。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。

剣、士、た、ち、は、氷、の、上、で、剣、を、交、え、る、のだ、った。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。

剣、士、た、ち、は、氷、の、上、で、剣、を、交、え、る、のだ、った。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。

剣、士、た、ち、は、氷、の、上、で、剣、を、交、え、る、のだ、った。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。

剣、士、た、ち、は、氷、の、上、で、剣、を、交、え、る、のだ、った。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。剣、士、た、ち、は、氷、の、上、を、滑、る、ように、動、く、ため、に、足、に、何、か、を、履、いて、いた。

蛇　足

渡米に際し、アーモストの正式な発音を会得しようと幾人にも聞いた。

エイムハースト？　アームハースト？　エイモスト？

どの発音もＡにストレスがあるのは間違いないが、私の耳には結局聞きとれなかった。

「アーモスト」は同志社人固有で、同志社人は敢えてこう表記する。

個人的雑感では多分、日本人には難し過ぎるからだと思う。　　（武田泰一　記）

『北白川集会 40 周年記念文集』より転載

クラークの邸宅

林　　育　雄

クラーク・ハウスの調査プロジェクトを発足し、間に合った時点は二つあるとされている。

最初に住んだ邸宅はクラークの書くリエトムの父ヤムクリ・ウリスムンが二人の結婚の前に買い求めておいたものを結婚と同時に二人に貸与したものである。この邸宅がどこにあったのか、明瞭に記されている資料に私はこれまで出会う機会がなかった。

つい最近まで私はこの邸宅がトマースム・カムトゥのスインキンズス内にある所クラーク・ハウスと思っ

てきたのだが、そう断定するには未解明のいくつかの出来事を説明しなければならない。あわせて、一九八一年に、ユトスマ河口は「クラーク・ハウス」というタイトルの六畳間ほどの建物のスケッチ前後を撮ったのだが、これもクラークの邸宅と結びつけるには難点多く、イメージがまるで異う。

そういうことであるから、本年（二九九一年）三月、私はトマースム・カムトゥの図書館第一課にある古文書保管室のクラークの図版のファイルの中に一片の記録を見つけた。（一）クラークの邸宅が、トマースム・カムトゥのスインキンズスから少々離れた郊外にある即トマースム・カムトゥのアリストムン・ハウスだ、というのである。

小屋のような粗末なアリストムン・ハウスを考えてみるとき、誠に、外観だけ見ても、クラークが住んでいたそうは思えないのである。

家賃を計算するクラークが最初のために邸宅の庭に買い求めたものを十数坪ばかりの簡易出来合いだから、それ、そもそもこれらをもって邸宅である。（この簡易住宅、トマースム・カムトゥの手毛織の一つである。）

そもそも、このアリストムン・ハウスがクラークの邸宅だったとすれば、クラークが最晩年の四年を苦しみつつ、しかしまた楽しく過ごしたのはこの邸宅、ということになる。二重は四二歳の老のトマースム・ニキンの前任者の住居であったとされるが、その書きぶりから判断するものである。それに続いた。

また、トマースムの表面から一言クラークの名前が消失寸前の中にあるように解釈した。その理由、本国でこの邸宅は医学だったクラークがトムをいえいえ回ったから「クラークの来日人は多いこと」と大変でありそうな話があるが、この結論の裏付けは、たのもうこの邸宅である。

クラークがアマースト・カレッジの教授を辞めて同じアマーストの町に創設されたマサチューセッツ州立農学校の校長になったのは一八六七年一月のことである。出来て間もない学校の学長に選出されたのが八月十日であり、同校が開校したのが同年十月二日のことである。(二) 開校されるまでは、準備期間だったわけだ。

一方、新島襄がアマースト・カレッジに入学したのが一八六七年九月であるところから、アマースト・カレッジにおいてはクラークと新島の間には師弟関係が結ばれた、ということがいえる。(和田洋一氏の「新島襄」には、当時クラークはアマースト・カレッジの化学の講師を兼ねており、新島も彼から化学を学んでいる、と書かれているが、誤りは、また、推測が含まれていないか。)

が、それはともかくこの二人の関係が、やがて深い信頼、友情へと発展するのは間違いない。

新島はアマースト・カレッジの一方の理学科生であった数学、物理学、化学、生物学、植物学、動物学、地質学などの科目に、特に力を注いだ。彼の下宿の部屋は研究室であったし、また、彼の書いたもの、論文などには科学的な記述が多かった。

当時、アマーストの人口は三〇〇〇人位(三)だったので、東洋からの日本人が来たとなると、その噂はすぐにまたたく間に広まっていったことは、それがよいことであればあるほど、ごく自然なことだったろう。

クラークは新島の評判をいろいろの人から聞くにつけ、日本という国に強い関心を持つようになった。また、日本人という人種に深い興味を感じるようになった。

農学校の初期、州立農学校にはまだキャンパスがなかったので、クラークが学校は毎日曜日、アマースト・カレッジのキャンパスに農学校の生徒たちを連れて来たという。また、日曜日は農学校の食堂が休みで食事が出ないので、これもアマースト・カレッジの食堂で食事を摂ったという。

クラークと新島の出会いがいつ、どのようなかたちであったかは明らかでないが、当時、クラークがその

記録・札幌農学校等の校舎日誌に残された新島に関するものを除く、「この学校は前の春頃の日本人の生徒であったJ・H・新島教授によって紹介された」と書いてあることや、また、クラークが新島を京都・同志社に尋ねた時に、クラークが新島に「マイ・ボーイ」と呼びかけたり、同志社の生徒に「新島はアマースト在学中はたいへんまじめな生徒であったが、今でもまじめである」(四) などと言ったりしていることから推測して、二人の親しい関係は、教室の中でというよりは、むしろ、アマーストの町やカレッジのキャンパスやキャンパス寮で出来上ったのではなかろうか。

新島が住んでいたアマースト・カレッジの寄宿舎(五)とクラークの自宅とは、目と鼻の先で、わずか八百メートルと離れていない距離にある。二人の、この八百メートルの関係は、新島がアマースト・カレッジを卒業する一八七〇年七月まで、約二年十ヶ月も続いたのである。これだけあれば二人は十分に親密になれる時間。

話をもどすことだが、新島がアマースト・カレッジを卒業するのと時期を同じくして、クラークは新たに北海道の開拓へと向かい渡っていく。

これは私の想像の域を出ないのだが、クラークによる招聘によって新島は、願わくば北海道に行ってクラークと同じ学園の学生たちと一緒にクラーク先生の元で働くことを思い描いたが、その願望を断念させ、次の留学先であるアンドーバー神学校へ行く日本の宣教師の道に思いを馳せたのではなかろうか。

クラークの元で働こうと考えたのは、クラークが学長をしていた州立農学校に籍をおいていたアンドーバー・ヒルの一般会衆派という教会で働いた経験であった。

開国をへまだ遠く新しくなったヘンリー・ワード・ビーチャーが、晩年、クラークの招きによって、当時日本でこのような将来の長い道のりを見たことはない、と感嘆したという記事(六)があるが、そのことの意味を考えてみたい

は後継者をもたないものであったらしい。現在は、残念ながら、マサチューセッツ州立大学アマースト校の敷地への敷地に囲まれて、廃墟であったとされるロチャクチャクアム湖沖は全く見えていない。

（ヘンリー・ワード・ビーチャーはクラークより十四年先輩のアマースト・カレッジの卒業生である。今もキャンパスには彼の銅像が立っている。アメリカが誇る十九世紀の代表的説教者。彼の妹が、アンクル・トムズ・キャビンの著者として有名なストウ夫人である。）

クラークはこの時代を農学校を見学に訪れる多くの客の接待用として別館に改装していたらしい。日本の農学校の寄宿舎に似て、和洋式の設備を備え、また、開拓地にふさわしく堅牢で趣のある建物だったという。残念なことだが、この建物は、クラーク没後四年目の一八九〇年に、火災で焼け落ちてしまう。

クラークが日本に赴くことを決めたのもこの時期である。

クラークは新島が日本にキリスト教主義の学校を作ることを支援していて、彼の帰国の費用をも出して、新島が日本に帰って行ったことを知っていた。

その新島が日本で一体設立が難しいといわれている京都という町で、ようやくキリスト教主義の学校を作ったということも聞いた。

ところが、キリスト教を邪教とする仏教徒や神官らの激しい妨害が続いて、京都府知事へ何度も迫って彼の学校に反対して来る。新島はまた京都府庁や中央政府に働きかけ、粘り強く、彼の学校の認可を取り消そうとしている。彼らはまた町中に説教会や演説会を催し、彼の学校をやめ潰そうとばかりの勢いであるが、新島は頑として彼らの説得を受け入れず、自分の学校を守り続けている。

以上の話を伝え聞いた時、クラークは自分の心の中に、何ものかが、ジーンと音をたてて来るのを覚えた。

大きな感動が彼の胸を突きあげ、彼の手がふるえ出すのだった。

新島が何に対して闘っているのかといえば、彼の祖国・日本に真の自由とキリスト教の精神を根付かせようとしているのだ。この二つは、正に、我がアマーストの建学の精神である。我々アマーストに学んだ者は、この新島と肩を組んで、彼を助ける手立てを考え出さねばならぬ。

クラークが日本にやって来たのは、日本政府が北海道・札幌の地に農学校大学を建設するにあたり、彼に教頭として来てほしいと要請があったからに他ならない。が、実はクラークが、日本に行く決心をさせたもの、それを決める重大な決断の前に、我にも問いかけるように、新島に会い直接話をして彼の覚悟を見極めなければならない。日本に行けば、日本に来れば、必ず新島を助けることが出来る。新島の不屈の精神と共に手を組んで、真の自由とキリスト教のために戦おう、と考えていたのだろう。

その一つが新島襄への援助証拠である。

クラークが、札幌農学校で、なぜ、あれほど熱心に聖書を教えることに固執したのか。

当時の開拓使長官黒田は、校内では聖書は教えない、という一札を取りに入れさせるほどであったので、やむなく、課外で、規則をくぐった時間で、聖書の講義を教えていた。

クラークはこれを公に言わず、心の中で密かに新島に共鳴していたのである。

クラークは『ボーイズ・ビー・アンビシャス』という有名な言葉を残して一八七七年四月十六日札幌を去るが、これより約一ヶ月後の五月中旬、京都の新島・同志社を訪問して新島を励まし、その後に帰路欧州からアメリカに帰っている。

さて、この書簡から二十年十ヶ月が経過した一八八五年一月一八日、今度は新島がアマーストを訪問している。

アマースト・カレッジのシーリー学長に会うためである。

新島は、その翌々日の三月二日、クラーク邸にクラークを尋ねた。この時、クラークは五十九才、新島は四十二才。

内村鑑三がアムチャンス・ヒルのクラーク邸を最初に訪問したのは、先に書いた新島がクラークを訪問した半年後の、一八八五年九月八日のことである。この時クラークは心臓病で床に臥せっていた。

内村は九月六日にアマーストに到着するや翌七日にはアマースト・カレッジのシーリー学長をその自宅に訪問し、会衆派教会の紹介でアマースト・カレッジに入学したい旨を彼に申し出、彼の快諾を得た。シーリーに内村を紹介したのは新島である。

シーリーから内諾を得た次の日、内村は、新島に言われたクラークに会うために、アムチャンス・ヒルを上って行ったのである。

アマースト・カレッジのほぼ中央に位置するジョンソン・チャペルの壁面には、このカレッジの発展に大きく寄与した理事者や教授、卒業生らの肖像画が三十枚飾られている。

新島襄の一番目立つところに飾られているのが新島襄の肖像画であることは日本でも知られていよう。

が、そのジョンソン・チャペルから百メートルと離れていないアマースト・カレッジの図書館特別室一階の古文書特別閲覧室に内村鑑三の肖像画が、ひっそり、また、新島の肖像画に飾られているのを知る人は少ない。

新島のそれが華やかな場所に堂々と飾られているのとは対照的に、内村のそれは目を瞑り、やや上向きに天に祈りを捧げている。まことに謙虚で静かな肖像画である。

内村はこのアマースト・カレッジにおいてシーリー学長の感化を受けて大きく成長し、遂に、回心を経験するに至った。

内村は回心の時の様子を次のようにその著書・日記に語っている。

「彼はその時語った。アメリカで、教会に関わるようになった時、初めて気がついて驚いたのは、Sacred（神聖）なので、彼は大いに感化された。それは聖なるものであった。」（十）

内村の与えられた聖書はコリント後書の第十章（八）であった。そこには回心を遂げていた時のことである。

この回心を経験したきわめて重要な日は、内村の日記から一八八六年三月八日、と思われる。

「三月八日

余の生涯に於いて極めて重大なる日なりき。基督の贖罪の力は今日の如く明瞭に余に啓示せられしこと無かりき。神の子が十字架に釘けられ給ひし事の中に、今日迄余の心を悩ましたる凡ての疑問の解決が存するなり。基督は余の凡ての負債を支払ひ給ひて、余を堕落以前の最初の人の清浄と潔白とに返し給ふ。今や余は神の子なり、余の義務は耶穌を信ずるにあり。彼のために、神は余の欲する凡てのものを余に与へ給ふべし。彼は彼の栄光のために余を用ひ給ふべし。而して遂には余を天国に救ひ給ふべし。」（十一）

内村が回心の喜びに浸っていた三月八日、彼の住む寄宿舎から一キロと離れていないアムチャンス・ヒルのクラーク邸で、クラークは最後の時を迎えようとしていた。クラークが死去したのは翌九日のことである。

内村は後年その消息を語っている。

「私が翌る日のことアマースト・カレッジの食堂で新聞を見て居ますと、『W・S・クラーク　ダイド』という記事を見まして、非常に驚きました。既に葬式は済んだ後であるので、非常に残念に思いました。もし誰かが知らしてくれたならば、私は先生に一度は会えたかも知れないのに、非常に残念な思いをいたしました。

[illegible]（十）

[illegible]

[illegible]（十一）

五年前（一九八六年）、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

（一）Delta Kappa Epsilon, Special Collection Archives, Amherst College.
（二）[illegible]
（三）A History of Amherst, Amherst Town, Appendix page 604.
（四）[illegible] No. 21 [illegible]
（五）[illegible]
（六）The Handbook of Amherst page 67, Special Collections, Johns Library Amherst.
（七）[illegible]
（八）[illegible]
（九）[illegible]
（十）[illegible]
（十一）[illegible]

[illegible]

4月19日(木)

ボストン着。6℃〝寒ー〟ほぼ札幌。気は落ち着くが、辺り英語ばかりで少々疲れる。成田搭乗時、時計&ベルトでブー音拒否、こんなこと初めて。何とか乗り込み18時30分発。暫くすると夕食、海老のカレー他。ビールをこぼしパンツまでびっちょり。Lalaランド、西部劇観賞そして睡眠、13時間あっと言う間の到着。ストレスなし。入国審査で指紋検査、ベトベトの機械気色悪し。そして手のかざし方悪いようで検査官機嫌悪し。左右手の4本と親指チェック計4回。散々英語でしゃべった後で「図を見よ」と…最初から言ってよ。バスに乗り込みサウスステーション、何だかドサクサに紛れて運賃払わなかった。空港wifi中々上手く行かない。宿でようやく快適環境。13時間遅れの時差。暗くなってからの出発で着いたのが午後とは言いながら日中、体が朝と勘違いしてるのか時差ボケ特になし。

4月20日(金)

さー、2日目。いつも通り4時起床、気温を確かめに外へ、、It's windy today.寒ー。体感気温0℃?クロークで市内略図を確認、ほぼボストン理解。一杯の朝茶、多分日本の3倍、多過ぎ。二度寝し、シャワー。ダウンタウンメインストリート経由でサウスステーションからレンタカーのりばへ。トヨタカムリ&保険&ナビ&ETC&6日で570ドル。初めての左ハンドル、最初の数分でバッチリ慣れる。アンドーバー・フィリップスアカデミー、素晴らしい環境!新島先生良心碑でパチリ。偶然にもH・Mちゃん(シンガポールからの留学。同志社ではなく東大に合格したそうで6月に日本に)のアテンドで図書館へ。生徒達はいかにもクレバーそう。アンドーバー神学校の場所、分からず。再度訪問約束。暗くなる前にピッツフィールドへ、アーモスト大学vsウィリアムズ大学vsウェズリアン大学ボート大会会場下見。まだ雪残ってる。道沿いの街々がそれぞれアーリーアメリカの風情あり、素晴らしい!走行距離、250㎞。

4月21日(土)

3日目。またも4時起床。ピッツフィールド内を軽く散歩。ん?腰に違和感、ぎっくり腰?onota lake 9時半アーモスト大学、ウィリアムズ大学、ウェズリアン大学対抗レース。ユニバーシティのアイビーリーグ8校に対しリベラルアーツカレッジ版をリトル3と言うらしい。アーモスト大学ぶっちぎりのビリ、練習してない?目を合わせられない。レース終了後、バーモント州ラットランド、グレース教会への道すがらアーモスト大学のライバル校ウィリアムズ大学を訪問。大学そのものが街、田舎道に忽然と現れる。人口7000人、勉強以外する事なしの風情。最近はアーモストを凌駕している様子。素晴らしい環境。新島先生への農夫2ドル寄付演説のグレース教会へ。荘厳で美しい!ここから同志社は始まった?感無量。詳細を知りたく隣の図書館へ。担当者分からず、口利きでHISTORYソサイエティのビル氏に講釈をねがう。新島先生のアーカイブを見つけ大変興味深い会話。ラットランドは花巻と姉妹都市だそうで、頻繁な交流があったそうだが最近はサッパリと悲しむビル氏。その彼が盛んに勧めるので地元の出身大学・キャッスルトン大学を帰りに訪問。聞いたこともない大学がなんと1787年創設。ここも唐突な郊外にある。アメリカの大学造りに対する猛烈な情熱に感嘆!今日は300㎞走行。以下覚えました1マイル1.6㎞。1フィート30㎝。1ガロン3.785リットル。本日の給油77円/リットル。℃=$\frac{5\times(℉-32)}{9}$

4月22日(日)

MA4日目「相棒小田切君、今日も気張って行きますぞえ」なぞと軽口叩いていると知らず知らずに左側を走ってる、デンジャラス。やはり毎朝リセットしないとダメ。ピッツフィールドを後にいざアーモストへ。道すがらクラーク博士の生誕地アッシュフィールドと言う1700人の小さな町に寄る。色々聞くが皆知らない。ガソリンショップでコーヒー飲みつつ探偵活動、怪しげな東洋人にきっと戸惑っただろう。ノーサンプトンを通ると若い女性が沢山、名門7シスターズの一角スミス大学の町。大統領婦人輩出第一位の噂も。さらにコネチカット川を越えいよいよアーモスト。小さな町のイメージだったが日曜日と言うこともあり大変賑やかな大都市の感あり。宿にチェックイン。軽く下調べにクラーク先生の碑を訪ねると何と7つ、多分北大が寄贈したのだろう。ここは札幌農学校行きを決意した邸宅跡。さらにクラーク先生のお墓の場所確認。道すがら何と絵本作家エリック・カールミュージアム発見。彼はアーモストを気に入って移住、アーモストはそんな素敵な街です。さてさて次は小田切君の大捜査で、私のアメリカの父が何故だかアーモストのアップルタウンという場所で8年前に死亡との由。Googleマップをたどると大きな敷地の様子。大きな邸宅なのだろー、と訪ね

ると何とそこはサ高住。ダメ元で8年前に死んだGavin.jrの情報が欲しい、とスタッフに要請。プライバシー保護があるので半分諦め気分でいると奥さんが居ると言う。？どういうこと？ママは死んだとばかり思い込んでいる私は事態の把握が出来ない。興奮のまま30年ぶりのママとの再会。血圧の上がった私と同時通訳の小田切君の混乱ぶりを想像下さい。話は尽きぬまま96歳ママの負担を考え、おいとま。あまりの頭の疲れを抑えつつ夕食の買い出しにスーパー・ジェイYへ。カップヌードルを買う貧乏くさい二人の日本語に反応する女性。怪訝そうに私達の方に。気の毒がって食事に誘ってくれたマリさん。何とクラークハウスに住むという。マサチューセッツ州立大学アーモスト校（クラーク博士が初代学長であるマサチューセッツ農科大学の現在名）の保育園の先生。又々血圧が上がる。通称Uマス、俗称パーマス（パーティー・マサチューセッツ）というらしい。昨今大学改革にのりだし、特別コースを作りつつある。Uマス内の何でもある巨大食堂で久方ぶりのお米を食す。カリフォルニアロール。のりの上のご飯をこれでもかこれでもかと押し付ける、でも美味しかったー。見送りがてら図らずもUマスを案内してくれたマリさん、有難う!!有難う!!

4月23日(月)

5日目、9時からのアーモスト大学キャンパスツアーに参加、西海岸出身のいかにも快活な女学生が同行説明。二組の親子とヘンテコな東洋人2人。子供は中学生だそうで、一点の曇りもない秀才風貌。決して広くないが適度な間合いで教会、図書館、学生寮、教室、芝、モニュメント、グランド、他建物が…。素晴らしい。是非、北海道の子供も行って欲しい。ツアーの中で見た数十人程度の授業が最大規模で、基本15人以内、4～5人もある旨。徹底的に鍛え上げるのでしょう。ツアーを終え、11時から日本での教師経験のある黒人スタッフから助成金ほか詳細説明。7名の子供とその親、そしてヘンテコな東洋人。こちらも全員見るからに賢そうな白人男子女子。質問が尽きず、私達も間合いみて質問。彼らも必死スタッフを離さない。解散後、ジョンソンチャペルでジョセフ・ハーディー・ニイシマの肖像画をパチリ、正面真横の一等地。図書館地下にある筈の内村鑑三画を探したが見当たらず。13時半にアーモスト大学ボート部コーチのウィリアムさんとジムナジウムで会話し練習ルームへ。そこで1872年優勝した際のオール発見。

往時新島先生も感化された筈、同志社開学当時さっそく琵琶湖でボート大会を開催したのもその影響があったのでは？アーモスト土産のキャップ、ウィンドブレーカー、サンバイザー、Tシャツ購入。その辺の女の子曰く世界で一番おいしいピザ屋「アントニオズピザ」のウィンドウ席に座る東洋人、微妙。アーモストコモン（中央広場）。確信はもてないが、札幌農学校派遣前のクラーク博士邸宅と目される3軒巡り。探せなかったがクラーク博士が眠る墓地。不幸中の幸い、大詩人のエミリー・ディケンスンの墓発見。その後コネチカット川までドライブ。アーモスト大学クルー見当たらず、スミス大学クルー応援。腹が痛い。恥を偲び、女子大学トイレ拝借。世界一の良妻賢母女子大学、もう少し綺麗にあって欲しかった！(^^)ゴメンなさい。ロッジに戻ると、96歳の昨日のアメリカママからのメール、すごい技能！NYにいる息子（私の友人）に連絡せよ、と。早速彼に留守電入れ、返事待ち。という事で疲れたので寝ます。おやすみなさい。

4月24日(火)

6日目、アーモスト大学のおさらい。私の耳にはやはりアマーストではなくアーモストに聞こえる。まずは新島先生と内村鑑三が寄宿した北寮はどこ？北と言っても何ヵ所も寮はある。窓口事務所で確認するも即答叶わずネットで調べてくれた。結局、ジョンソンチャペル左隣（北側）の寮がそれ。150年前の寮は多分2～3箇所しかなかったのでしょう。そのちょっと先にアンクルトムの著者ストウ婦人を姉に持つヘンリー・ワード・ビーチャー（アメリカが誇る19世紀の代表的伝道者）の銅像。アーモストを背に西へ車を走らせアッシュフィールドへ。ガソリンスタンドで捜索活動しクラーク博士の生まれた家を確定。近くに行くも特定出来ない。飛び込み営業するとご近所の根性の良いおばさんと遭遇。3軒隣のあそこだよと同行してくれた。おばさん有難う。あーここで生まれたのか！次は私のアメリカ父のお墓参り、バーモント州ブラトルボロのミーティングハウスヒルセメタリーへ。手を合わせた後、相棒小田切君と「折角だから名産を食べたいねー」なぞと言っている矢先に車が並んでいるバーモントカントリーデリなる建物を発見。近所では有名だそう。バーモントと言えばリンゴとハチミツとばかりにアップルパイに挑戦。苦手だったがペロリと完食。後味も良く他のデリも全

てデリシャス。気を良くし、そこの名物直径20㎝はあるクッキーを購入し、96歳のアメリカママにお土産。17時約束のアーモスト大学ボート部訪問、モーターボートに乗せくれるようだったが風強くなしに。なんと、何より嬉しいオリジナルTシャツ&帽子を頂いた。ウィリアムコーチご恩は忘れません。帰り道、ウォルマートで衣類、コンバース靴購入。でもっていつものジョイYで夕食購入。アーモスト最後の夜、相棒小田切君、ビールで乾杯と行きましょう！では。

4月25日(水)

7日目、すっかりアーモストに馴染んだが任務終了、9時半彼地を後にアンドーバーへ。カーナビ、日本語設定にしてあるので実に快適だが、混み入っている地区では反応が遅れ、たびたび曲がり損ねて仕舞った。1日目フィリップスアカデミー訪問時、不明だったアンドーバー神学校を再訪。何のことはない、フィリップスアカデミーそのものと混在していたようです。紆余曲折があり合併場所変更し今はニュートンにある。それらを含めメンコイH・Mちゃんのアテンドで校内ツアー、まず初めに歴史建物研究者ペイジ・ロバーツ女史より新島先生情報を頂く、2ドル寄付話に大変興味をしめしてくれた。教室、講堂、ジム、図書館、新島先生が使ったであろう体育館、勉強したであろう建物。H・Mちゃんは神学校を大学院と言っていた。フィリップスアカデミーは全体にスポーツ強く、ボート部も同様で部員数が最も多い。同志社高校ではなく慶応高校と交換留学があるそう。ん？微妙に悔しい。図書館はいかにも天才秀才然の生徒で一杯。その入口にパパブッシュの銅像。H・Mちゃん、小雨降るなかの案内、感謝極まりない。東京大学に戻ったらまた会いましょう。どんどん雨脚が強まる。慣れない左ハンドル、何とかボストン着。強雨の中、道確認を込め街中一通り廻る。工事やら川やらの影響で走りずらい。事故もなく一安心。車窓から撮ったチャールズ川を相棒小田切君におくって貰います。

4月26日(木)

MA8日目。相棒小田切君、急遽NY行き決定。一人珍道中、如何なりますことやら。10時半サウスステーション目指してナビに従うもどんどん目的地から離れて行く、心臓が高鳴って行く、仕舞いには電源ダウン！な、なんと。高速なのか止まるにとまれない。ニュートンまで来てしまった。まずは落ち着こう。ナビ再充電し出発進行。何とか小田切君をバスセンターで下ろし一人で空港レンタカーセンターへ。日本の空港でもままならないのにここはボストン。簡単に上手く行く訳がない。同じところを何回もまわるもだめ。ギブアップ！お金で解決、中米系下請け人を要請しガソリン給油&リターン。余りの安堵感に思わず50ドルもチップ！後で後悔。まー1日かかっても解決しなかったことを思えば。飛行場から港をパチリ、新島先生を乗せたワイルドローバー号が入港したであろう港。飛行場からサウスステーションに戻りウォーキング開始。アーモスト大学帽、FILAのジャージ、黒の靴下、革靴、バッグたすき掛け、はい「変なおじさん」の出来上がり。ボストン茶会事件現場、ボストン公園をぬけ、ノイローゼ気味の新島先生が必死でA・ハーディーさんと面接したジョイストリート建物。今の私でさえ異国の地に困惑と不安を抱えるのに、いわんや150年前。私の独善理解では日本での崇高な夢と言うより実際は個人的危機感の方が強かったと思う。公園からコモンウェルスavenueをひたすら西へ。ジョージ・ワシントン始め偉人銅像がズラリ、またこの通りは桜街道、嬉しい落ち着く。行き交う皆が美男美女で「ある愛の詩」のライアン・オニール、アリ・マッグロウに見える。マサチューセッツavenueを左折、すぐにバークリー音楽学院、何とも奇抜な学生達。途中土産にと感じ良い店、よく見ると無印良品(笑)。200mほど歩くとボストン交響楽団。そこを右折しボストン美術館、裏の公園（入ってすぐに日本からの寄贈の鐘）を通りレッドソックスのフェイウェイパーク、からの寄宿先へ。新潟出身のH・Tさん経営のTおばさんの宿。ほとんど信号を気にしない人々をまね、車道を渡ろうとした時、引かれそうになった。日本の右左確認に戻っていた。クワバラ、クワバラ。

4月27日(金)

MA9日目、昨日歩きすぎたか？体に筋肉痛少し？地図上は7㎞だが、迷ったり寄り道したりでどうやら10㎞はあるいたのだろう？今朝は快晴、8時散歩開始！宿から100mボストンユニバーシティ橋からチャールズ川を渡り右折（東へ）、MIT（マサチューセッツ工科大学）でUターンしチャールズ川沿い散策、実に気持ち良し。それにしても米国人は良く走る。そりゃ、あんだけの量と甘味を取れば

走らないではいられない?!。米国人は基本太ってると言える。ボストン大学ボート部、橋を戻り、学生街の喫茶店を横目に帰宿。次活動に向け2度寝をする。12時半出発、ボストン交響楽団ホールへ。入口box office でチケット交換、中に入るとマイクタイソン似の警備員、荷物の中身を見られ、ビビる。チケットの見方が分からない、席番A11?誘導される。一番前の真ん中!音楽の迫力もさることながら、彼らの舌での歯滓処理の様子、互いのイメージ合わせ、心の準備が手に取るように分かる。全体は見えないが、裏舞台を見る楽しさ。見える20人ほどの楽団員が皆誰かに見えてくる。指揮者はテニスのマッケンロー或いはアートガーファンクル。主席バイオリニストはポールボッツ。第一バイオリン　藤田弓子、ヒデ&ロザンナのロザンナ、ベッツィー&クリスのベッツィー、ホーキング博士。第二バイオリン　お茶の水博士、Kさんの妹あっちゃん(どうやら彼女は妊婦のようだ)、ロナウド、ウィリーネルソン、キャサリン妃、ペルーのアニータ。チェロは温水さん?いや踊る大捜査線の斉藤暁。フルートはタレント・セインカミュ。クラリネットは宮崎駿。こんな布陣です。我ながら相当的確だと思う。途中休憩時、皆を真似しビールを。あっと言う間の2時間でした。外に出ると大雨。時間があるのでノースイースタン大学の前を通りボストン美術館、時間なく入口で写真とりつつ断念。さっきのビールと寒さで尿意、メキシコ店に入店。17時TRINITY教会で相棒小田切君と合流、あのプルデンシャル生命の本社スクウェアでロブスター&カニ&シュリンプサンドを食す。さて、19時からのレッドソックス vsブルージェイズ観戦、雨、どうしよう?結局断念、次回までのお楽しみ。グリーンラインに乗って帰宿。ボストン人の特性なのか、米国人の特性なのか?私の雑感。①3分の2は雨が降っても傘を指さない。②東洋人が行けてない。黒かチグハグな色合わせ。③やたらとクラクションを鳴らす。多分取り敢えず鳴らしとこう的な?④甘味含め食い過ぎ。⑤信号青が多分15秒?短か過ぎ?老人&障害者は歩くなと言うことか?⑥大学多すぎ、学費は日本の5倍〜10倍?基本奨学金を貰う様だか日本より破産が心配⑦米国人達の匂いが似ている。昨日洗濯して分かった。どうやら芳香付き洗剤が原因のようだ(^^)

4月28日(土)

10日目ニューヨーク、ニューヨーク!ボストン12時発メガバスなんと7ドル!走行距離340㎞。がしかしさすがアメリカ、1時間5分遅れの17時20分着。道中余りに暇なので、行き交う車を見続けた。日本人の贔屓目なのか?3分の2は日本車に見える、トランプも怒る筈。特にスバルが健闘している。摩天楼ど真ん中で下車、宿へ。大変清潔で好立地そして50ドル。荷物もってくれて、ウェルカムドリンク(ビール)で迎えてくれた。早速腰を上げ、地下鉄代チャージからのリトルチャイナ界隈で中華料理からのジャズコンサート。ピアノ・ビルロビンソン、サックス&ベース・小錦、ソプラノ・ブルースウィルス、アルト・関口メンディー、テナー・若き日のマイケルジャクソン、バス・シルベスタスタローン、アカペラで皆が上手し、こう言う若手がここには沢山いるのだろう。散々エビチャーハンを食べたのに、隣のピザ屋でピザを。1ピース頼んだらダメだと言う、安いので2枚で5ドルじゃないと採算が合わないのでしょう。あー食べ過ぎ。いかんいかん、アメリカ人になってしまう!

4月29日(日)

結論から言えば万歩計25660歩でした。多分20㎞?相棒小田切君は専門のカンファレンスへ。僕は「変なおじさん」スタイルでウォーキング。開始早々、いきなりステーキ日本語看板見て心安らぐ。まずは土産を買いに最近流行りだというチェルシーマーケット(旧ナビスコ工場)へ、オリジナルスパイス購入。東に向かいセオドアルーズベルトの生誕地。南に進みソーホー界隈と思われるGUCCI看板の製作現場、虎のリアル画、独特なウィンドウディスプレイ。ニューヨーク大学(ここも校色が紫色、どうも古い学校に多い?)、司法裁判所、フランクリン像、グランド0、自由の女神フェリー乗り場(日曜日なので観光地は混み混み)。時間がなくなってきた。タクシー15ドル、宿に戻りシャワーで汗を流し13時に30年ぶりに会う知人(札幌オリンピック時5ヶ月拙宅に下宿、リトル3の一角ウェズリアン大学卒)との待ち合わせ場所へ。フリーwifiでグーグル翻訳活用、期待程では無いもののそこそこ。やはり会話は間合い、そこは機械では限界があります。食後、彼と一緒に散歩。先日火事があったトランプタワー、セントラルパーク、スープマンと言う有名TV現場、ティファニー、第二トランプタワー、St.パトリック教会、ロックフェラーセンター、パブリックライブラリー、メイシーズ本店、ペンンシルベニアステーションで別れ、18時に小田切君と合流し彼の級友(一橋大学卒の才女でNY公立大学の学生課勤務)と大学論、トランプ論、アメリカ人論を語って頂いた。

2018年度 年間活動予定＆報告

1月	19日	**新年会**
		居酒屋『ちりとてちん』南6条西4 G4ビルB1　会費4,000円　女性3含15名
2月	12日	**スキー部練習会**
		キロロスキー場　参加者5名　久しぶりのスキーに体が悲鳴　大阪より早瀬さん参戦5名
3月	16日	**弥生例会**
		居酒屋『ちりとてちん』南6条西4 G4ビルB1　会費4,000円　初参加田中氏含10名
5月	19日	**全道クラブブロック会議＆皐月例会**
		『瑠玖』南2西6 狸小路6丁目南西角　会費3,000円
6月	2日	**北海道支部総会懇親会＆総会**
		『プレミアホテル-ＴＳＵＢＡＫＩ-札幌』 会費5,000円
	14日	**函館碑前祭**　参加費無料　家族同伴可！　乗用車に分乗
7月	7日	**第15 回同立戦ゴルフコンペ**
		滝のCC
	13日	**釧路OB会総会**
		『三共八千代寿司』共栄大通4-1-18
	15日	**“DOSHISHA Camp in Hokkaido”**　アウトドアコミティーが企画するキャンプです
		今年は羊蹄山山麓で行います
	20日	**文月例会**
8月	3日	**旭川同窓会夏の集い**
	8日	**第19回 関西六大学札幌OBゴルフ対抗戦（滝のCC）**　昨年は宿敵立命を僅差で下し優勝
		樹徳会主催ビール会
		他学部ＯＢ参加大歓迎　『すみれホテル』北１西２
	25日	**オホーツククラブ総会&懇親会**
		ラグビー部牛一頭贈呈：北見市モイワスポーツワールド
9月	21日	**月見例会**　（９月を旧暦表記すると長月です　ホテルの立て看板に「同志社長月例会」と記載したところ 同志・社長月例会と読めてしまうので改名を指示されました）
		三好杯争奪ゴルフコンペ　故三好支部長に敬意を表し秋にゴルフコンペを開催しております
		札幌ゴルフ倶楽部由仁コース
11月	11日	**関西六大学札幌OB懇親交流会**　交流会は本年度の関西六大学対抗戦優勝校が幹事をします
	11日	**同志社ホームカミングデー（京都）**
	16日	**霜月例会**
	17日	**樹徳会北海道支部 定時総会**
		『すみれホテル』中央区北２西２
	23日	**小樽クラブ総会**
		十勝クラブ総会
12月		**釧路OB会忘年会**
	1日	**クリスマス会**
		『プレミアホテル-ＴＳＵＢＡＫＩ-札幌』 会費 6,000円
		会員家族を含め約120名の大パーティーです
		痩ッチョのサンタや太ったトナカイが狭い会場を走り回り子供達にプレゼントを配ります

http://hokkaido.doshisha-alumni.org

行事予定の詳細はホームページに最新情報を掲載しております、確認をお願いします。